

概要

- 鈴鹿市、亀山市の**茶および植木産地**は、価格や需要の低迷から、**売上が大幅に減少**してきた。
- このため、茶および植木生産者の**経営複合化**による所得向上を図るため、**白ネギを推進**した。
- この結果、白ネギ部門での1戸あたり販売金額が約200万円に到達し、**農家所得の向上**につながった。
- また、白ネギの栽培面積は当初2haから16haへと拡大し、販売金額**1億円を突破する産地**となった。

具体的な成果

1 茶および植木生産者への白ネギ導入による所得確保

- 白ネギ部会員46名のうち、約半数は茶および植木生産者
- 部会員1戸あたりの平均作付面積30aで、平均販売金額は200万円を突破
- 茶および植木生産者の**経営継続**に直結

2 白ネギの産地化

- 白ネギ栽培面積の拡大および販売金額の向上
(H24→R4)

- ① 栽培面積 **2ha → 16.5ha**
- ② 販売金額 **→ 1億円**

3 機械化モデル体系の確立

- 全自動収穫機を柱とした**機械化モデル体系**を策定
- **大規模生産者**の育成、**新規栽培者**の確保へと進展



普及指導員の活動

- | | |
|--------|---|
| 平成24年 | ■ 推進品目として白ネギを選定し、合わせて 部会組織の立ち上げ を支援 |
| 平成30年～ | ■ 機械化一貫体系 の実証、技術確立への取り組み |
| 令和3年 | ■ 「鈴鹿の白ネギ」 経営マニュアル を策定し、新規栽培者の確保への取り組み |



普及指導員だからできたこと

- 専門技術を持ち、試験場や他県の技術を知る普及指導員だからこそ、茶・植木生産者の複合経営に適した**新規導入作物を提案**し、機械化体系を含む栽培技術を定着させることが可能であった。
- 日頃から関係機関と連携している普及指導員だからこそ、先進農業者、JA、研究機関、県行政、民間企業等の関係者を結びつけ、**産地の育成に向けたコーディネート**が可能であった。

三重県

茶および植木生産者への白ネギ導入と産地化

活動期間：平成24年度～（継続中）

1. 取組の背景

三重県は茶生産量が全国3位であり、鈴鹿市および亀山市が主要産地である。また、鈴鹿市は全国有数の植木の産地でもあり、昭和50年代以降にサツキ・ツツジの出荷数量が全国トップとなった。しかし、茶は消費形態の変化から価格が過去10年間で半減し、植木は公共事業削減等の影響により需要が大きく減少している。このため、茶および植木生産者の所得確保のため、複合経営品目として野菜の導入を図った。

2. 活動内容（詳細）

（1）推進品目の選定

複合経営品目の選定にあたりJA鈴鹿等と検討を重ねた結果、白ネギを有力候補とした。白ネギは市場価格の変動が少なく、露地野菜の中では面積あたりの収益性が高いことに直目した。また、労力の必要な出荷調製作業が秋冬期となるため、茶および植木生産者に無理なく組み込むことが可能と考えた。

（2）白ネギの推進

白ネギの推進にあたり、「JA鈴鹿白ネギ部会」を立ち上げた。茶や植木生産者の中には、野菜を初めて栽培する農家も多くいたが、部会活動により技術の高位平準化が図りやすくなった。また、組織化により市場での産地競争力を高めることにもつながった。所得確保には1戸あたりの栽培面積を拡大する必要があり、大規模化に適する省力栽培技術を検討するため、機械化一貫体系の実証試験に取り組んだ。

省力栽培技術、ネギハモグリバエや白絹病など難防除病害虫対策、輪作体系などの課題に対して、対応策を「鈴鹿の白ネギ 経営マニュアル」としてとりまとめ、推進資料として活用した。



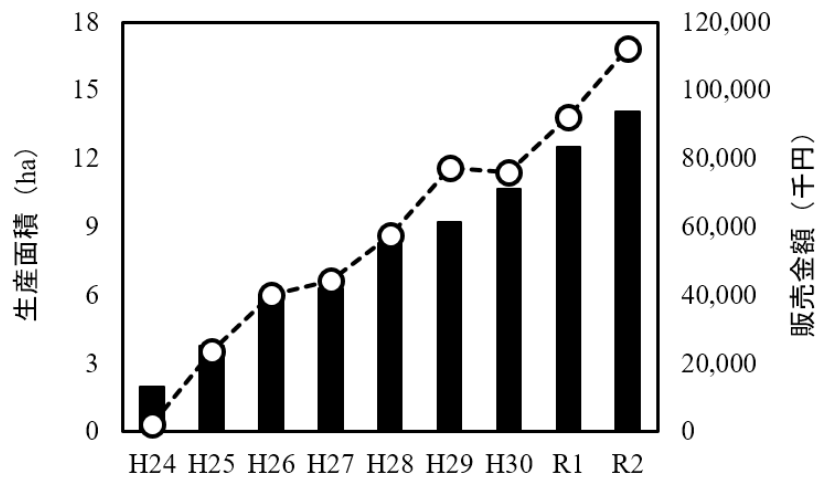
「鈴鹿の白ネギ経営マニュアル」



白ネギ専用収穫機の実証試験

3. 具体的な成果（詳細）

白ネギの栽培面積は、部会が発足した当初の平成24年度は2haであったが、令和2年度には7倍となる14haまで拡大、販売金額で1億円を突破した。令和2年度の部会員数は約50名で、半数以上が茶および植木との複合経営体である。部会員1戸当たりの白ネギの平均作付面積は30a、平均販売金額は約200万円と農家所得が向上し、茶および植木農家の経営継続へとつながった。所得向上に必要な大規模化に向けては、乗用管理機、防除機、専用収穫機による機械化体系を実践するモデル農家が育成された。また、白ネギを経営の柱とする新規就農者も多数現れており、産地の生産面積は毎年着実に増加している。



J A 鈴鹿白ネギ部会の生産面積および販売金額の推移

棒グラフは生産面積 (ha)、マーカーは販売金額 (千円) を示す。

4. 農家等からの評価・コメント（JA 鈴鹿白ネギ部会長）

鈴鹿地域西部は白ネギの栽培に適した黒ボク土主体の地域であることや茶・植木の単価低迷が起因となり露地野菜との複合経営へ転換の意向のある生産者を中心に推進したことが、産地の拡大につながったと考える。白ネギは、作型も秋冬作から春作までと多岐に渡り、収穫期間も長く、安定かつ高単価で販売できる点が、鈴鹿の生産者にとって魅力的だったのではないかと推察する。

参入当初は栽培方法、機械の使い方等、何もわからないところからのスタートだったので、技術習得まで大変だったが、10数年経過した現在では、部会の栽培方法も確立され、部会員の栽培技術も向上してきた。今後は、毎年数名ずつ参入する新規栽培者に対して、新規向けの研修会等を通して技術情報を提供し、部会全体の技術向上を図っていきたい。

近年は栽培年数の経過及び産地が拡大するに伴い、連作障害や土壌病害の発生が心配される。緑肥や他露地野菜を活用した輪作体系や心土破碎等による排水対策について、部会全体がより関心を高め、取り組んでいくことが産地の維持継続に繋がっていくのではないかと考えている。

白ネギ栽培の規模拡大の妨げになっている主な作業として、収穫・調整作

業及び防除作業が挙げられる。今後、更なる規模拡大を考えると自動収穫や防除機等の導入が必須となることから、補助事業等を活用して機械化を進めることで、更なる産地拡大を目指していきたい。

5. 普及指導員のコメント（中央農業改良普及センター・主査・増田 実）

鈴鹿の白ネギは、地域産業の課題や環境が白ネギ栽培にマッチしたことが急速な産地育成につながった。特定の産業（分野）や特定の品目に固執するのではなく、広い視野で地域の産業や環境に関心に向け、現状や課題を把握することが新たな産地を育成する上で重要であることを改めて気づかされる事例である。

6. 現状・今後の展開等

白ネギは安定した需要と収益性の高さから、更なる機械化によって規模拡大を図る農家が現れているものの、産地全体で見るとその割合は依然低い状況にある。また、気候変動の影響から夏場は生産が不安定であり、連作に起因する難防除病害虫の増加も確認されている。このため、栽培技術の高度化とともに、機械高性能化による規模拡大の提案、周年生産による収益力の強化を図ることが今後の課題である。